

自然を語る会 2023年3月18日(土)

印鑰智哉氏講演(動画)『食糧危機は一夜にしてならず』

@あびこ市民活動ステーション~我孫子駅前“けやきプラザ〈10階〉”6名 & Zoom

担当 岩淵徹郎

気候、新型ウイルス、平和、健康 他---多重危機の中、今まさに食料危機が迫った。主要食料を輸入に頼る日本は、低自給率の故に“世界で真っ先に飢える国”と報じられた。その由来?解決法はあるのか?“いんやくともや氏の動画”より学び、議論した。

元祖は日本:アグロエコロジー(自然農業/有機農業)、世界の後塵を拝す。原点に戻ろう。食のグローバル化(少品種大量生産--大豆、トウモロコシ、小麦、ジャガイモ等々)、化学肥料、農薬、遺伝子組み換え種子を使った“工業的農業”を改め、日本に適した農業、自然農を普及させ、多国籍企業による種子を含む(工業的)農業支配を脱しよう。

遺伝子組み換えは、雑草を枯らすか虫を殺すかの何れか。だが虫も雑草もすぐに耐性を持ち、作物が毒性を持つ。作物の花粉がミツバチ等に作用し、生態系は貧する。

“工業的農業”は”遺伝子操作(例:ゲノム編集等)に活路を求めたが、土、水、土壤微生物、丸ごと農地を劣化消失させた。多彩な命を無視する工業的農業で食料危機を脱出できぬ。

会員からの発言:(食料自給率が1%に満たぬ東京だが)「緑地も畑も湧水もある、澄んだ川も農家もある(東久留米市)」「近隣の農家も共に活動している」。有機米学校給食の千葉県いすみ市、木更津市、有機野菜給食の今治市では地元商店へ、家庭にも広がった。各自治体、家庭、社会へ有機の波が及んでほしい。

生きものの命を大切にす有機農業/自然農こそが、失われた農地/牧場の土を再生する。そして食料危機を救うだけでなく、炭素を地中に貯留するので地球温暖化=気候危機対策にも大いに役立つ。好循環は多重危機諸課題の治癒にもつながり、人間は笑顔に、生きものは生き生きと生きるだろう。

遺伝子操作の心配がある“輸入の種”でなく、日本の優れた“在来種”の種を守り育てる。地産地消、産直、食料自給。循環型の有機農業/自然農をしっかりと確立しよう。

こんな目的で(私の解釈)、「ローカルフード法/条例等」が準備中である。この法案は有機農家育成を国が地方自治体を支援して行うものらしい。世界は地球危機(温暖化)対策の一つとして、すでに有機農業へ向かっている。日本もようやく動き出す。

(参考図書など)

鈴木宣浩著『世界で最初に飢えるのは日本』 講談社+α新書

堤未果著『ルポ 食が壊れる』 文春文庫

印鑰智哉氏 動画『食糧危機は一夜にしてならず』

*「ローカルフード法」は川田龍平参議院議員が主導し超党派で立法化を図る。

鈴木、堤、いんやく3氏は法案を支える重要なスタッフである。(文責:岩淵)